意味コワ!

気づいた瞬間、ゾッとする話

—

鍵谷端哉

Presented by
Motoya Kagitani

目次

第1章 ―― 誰かに聞いた奇妙な話 005

学校の怪談／この人探してます／怖い話の本
トイレの花子さん／お前は誰だ
異世界へ行く方法／地縛霊
出られない教室／首無しライダー
口裂け女／影法師

第2章 ―― どこか身に覚えのある話 071

焼き肉屋にて／学級閉鎖／一階の奥にあるトイレ
しんちゃんは僕のことを何でも知っている
クラスチャット／猫の目／爪とぎ
異次元に繋がる箱／シルバーウィーク
顔も見たことのない親友／校内放送

第3章 ―― 決して他人事ではない話 137

同じ毎日／動く人体模型／鏡の中の友達
お土産／お気に入りの雨合羽／一番うしろの――
近づいてくる／死を見る鏡／防犯システム
病院にいる友達／使い捨てカメラ

第1章 ――誰かに聞いた奇妙な話

STORY 1

学校の怪談

この学校の七不思議のひとつ

理科室の人体模型が勝手に動く

最近学校ではオカルトブームで

夜に学校に忍び込む生徒が多く

その噂が立ち始めたっぽい

僕は廊下で人体模型を見つけている。

人体模型は理科室にあるはず。

つまり、人体模型が理科室から廊下に動いていることになる。

STORY 2

この人探してます

カイトくんは物知りだ。
テレビとかネットとか本とかよく見てるみたいで、本当に色々なことを知っている。
この前なんか、政治のことで先生もビックリするようなことを話してた。
僕なんかは何を言ってるかさえ、よくわからなかったけど。

カイトくんのすごいところは、全然、自慢しないところだ。
そして、僕を馬鹿にしないのも嬉しい。
クラスのみんなは、何かあるたびに僕をからかってくる。
僕はちょっと勉強ができないのと、運動が得意じゃないってだけなのに。

「勉強なんて、コツを掴めば簡単なんだけどな」

そんなことをカイトくんはサラッと言う。
カイトくんは言った通り、テストでも百点を連発している。
前にそのコツを教えてもらったけど、よくわからなかった。

「ただ、運動だけはどうしてもダメだな。あれもコツがあるらしいんだけど、よくわかんねー」

そう言って笑うカイトくん。
確かにカイトくんは僕と一緒で、運動が苦手だ。
カイトくんには悪いけど、なんかそれが少しだけ嬉しい。

「けどさ、やっぱり重要なのは体力よりも知識だよ。だって、体力じゃ知識は補えないけど、知識は体力を補えるからな」

またカイトくんは難しいことを言う。
頭の良さが運動能力をカバーできるってこと？

よくわからない。

「普通にやったら高校生相手に喧嘩じゃ勝てないだろ？　でもさ、例えば薬……毒と言った方がわかりやすいか。それを使えば簡単に高校生にだって勝てるんだぜ」

そう言って、胸を張るカイトくん。

なかなか怖いことを言う。

前に、毒の作り方にハマったらしく、一時期、よく山に薬草を採りに行ってたことがあった。

僕も付き合って一緒に行ったことがあったけど、全然、草の見分けがつかなくて役に立たなかった。

「お金だってさ。スポーツで稼ぐのは大変だけどさ。頭を使った方が簡単にお金儲けできるんだぜ」

今のうちからお金を稼ぐことを考えてるなんて本当にカイトくんはすごい。

僕なんか、どうやってお小遣いを上げてもらうか、としか考えてないのに。

きっと、カイトくんは将来、お金持ちになるんだろうなと思う。

僕は普通でいいや。

っていうより、普通にもなれないかもだけど。

下校中にそんな話をしていたら、あるものを見て、カイトくんがピタリと立ち止まった。

それは交番の横にある掲示板だ。

そこには人の顔が載ったポスターがたくさん貼ってあった。

「見ろよ。これ、懸賞金が五百万だって。すげーな」

紙には『指名手配』って書いてある。

捕まえたらお金がもらえるやつだ。

「懸賞金は一千万円が上限らしいな。しかも実際に設定されたこともあるみたいだぞ」

本当にカイトくんが知ってることは幅広い。
そんなことまで知ってるんだ。

他のも見ていると、カイトくんが「あはは」と小さく笑い出した。
どうしたのかと聞いたら、カイトくんがこう言った。

「この人探してますだってさ。もう死んでるのに」

ポスターには『行方不明者』と書いてあった。

「知ってるか？　捜索願を出すと、だいたい当日だと四十五パーセント、七日以内だと三十四パーセントくらいの確率で見つかるらしいぞ。結構、見つかる確率って高いんだよな」

そんなことまで知ってるのか。
本当にカイトくんは物知りだ。

カイトくんはある行方不明者のポスターを見て
「もう死んでる」と言っている。
警察も知らないことを、なぜカイトくんは知って
いるのだろうか。
もしかするとカイトくんは、行方不明と何か関係
があるのかもしれない。

STORY 3

怖い話の本

前にお父さんに怪談ライブに連れて行ってもらってから、僕はすっかり怖い話にハマってしまった。

お父さんに「怖い話を知らないか」と聞いてみたけど、お父さんも聞くのが好きなだけで、話自体は知らないらしい。

だから学校の図書室に行って、怪談の本を借りてこようと思ったけど、意外なことに図書室にはそういう系の本が一冊もなかった。

ガッカリしていると、先生が「どうしたんだ?」って声をかけてくれた。

僕は怖い話を読みたかったと言ったら、先生は「あー、なるほど」と言って顔をしかめた。

先生の話によると、昔はホラーブームで、図書室にもそういう怖い系の本が結構置かれていたらしい。

でも、二年くらい前に学校に幽霊が出ると噂になって、そのときにちょうど生徒が事故で亡くなったということがあったって先生は言う。

それが幽霊の仕業じゃないかって、生徒たちが怖がったこともあって、そういう怖い話が載っている本は処分されたみたいだ。

撤去される前は割と豊富に置いていたらしいから、読んでみたかったなぁって言ったら、先生が「よし、任せろ」と言ってくれた。

実は先生も怖い話が好きで、たくさん怖い話を知ってるんだって。

しかも、先生が話してくれる怖い話は、この学校で本当にあった怖い話らしい。

僕は先生の話してくれる怖い話にすっかりハマってしまった。

放課後に図書室に行って、先生から怖い話を聞くのが毎日の楽しみになった。

先生が話してくれる怖い話の中には三組のTくんや、四年生のSさんとか、僕が知ってい

る人の話も出てきて、凄(すご)くドキドキした。
そういえば、Tくんが一ヶ月くらいずっと学校を休んでたのはそういうことだったんだ、とビックリしたこともあった。

でも、ある日の放課後、図書室に行ったらその先生がいなかった。
どうしたんだろうと思っていたら、代わりの先生に「O(オー)先生は急に体調を崩しちゃって、学校を辞めちゃったのよ」と言われた。
昨日まで元気だったのに、おかしいなって思ったけど、僕にはどうしようもなかった。

先生がいなくなってしまったから、僕は楽しみにしていた怖い話が聞けなくなった。
凄くガッカリだ。
また先生の話を聞きたい。
そんなことを思う日ばかりだった。

そんなあるとき、お父さんが怖い話の本を買ってきてくれた。

とても古い本で、ずっと売り切れだったけど、また売り出されたらしい。

僕はワクワクしながら本を読んだ。
でも、僕は物凄くがっかりした。
それは本に載っていた話が、先生が話してくれたのと同じだったからだ。

知ってる話ばっかりで全然面白(おもしろ)くない。
そう思って読んでいると、最後とその一つ前の話だけは初めて聞くものだった。

最後から一つ前のは、学校の先生が首吊り自殺する話。
そして、最後は怖い話が大好きな男の子が、幽霊に憑(と)りつかれるという話だった。

この二つは凄くドキドキして、とっても面白かったから、明日はお父さんに、ちゃんとありがとうって言おう。

先生が話してくれたのは全部、僕の学校で『本当にあった怖い話』である。

それが昔の本に載っているのはおかしい。

もしかすると、その本は怪談の本ではなく、予言書だったのかもしれない。

そう考えると、僕の知らない二つの話が気になる。

一つは先生が自殺する話。

O先生は体調を崩して急に学校を辞めているが、これは先生が自殺したのを誤魔化(ごまか)したのかもしれない。

そうなると、最後の話の『怖い話が大好きな男の子』は、僕のことになる。

僕にはこの後、よくないことが起こるのかもしれない。

STORY 4

トイレの花子さん

どの学校にもだいたい、七不思議というものがある。

音楽室のベートーベンの目が光る。

誰も座っていないのにピアノが鳴る。

階段の大きな鏡に自分じゃない誰かが映る。

階段の数が変わる。

美術室の絵の中に引き込まれる。

人体模型が動く。

あと、忘れてはいけないのは『トイレの花子さん』だ。

私は知らなかったんだけど、トイレに花子さんが出るという話は、七不思議の中でも一番

有名らしい。
ビックリすることに、花子さんはほとんどの学校で出るみたい。
そんなはずないのにね。

とにかくこれが、学校の七不思議だ。

かと言って、今の時代にそんなものは流行らない。
みんな、ゲームとかカードとかに夢中で、怪談なんてあまり興味がないみたいだ。
怪談……というかホラーは、誰かが話すとかじゃなく、動画サイトで見るくらいなんだって。

私はゲームもカードも持ってないし、動画も見ないから、話に入れなくてちょっと寂しい。
もし持ってたら、みんなとたくさん遊べたりするんだろうか？
なんて考えてしまう。

でも持ってないんだから仕方ない。

ないものねだりなんてしても、意味なんかないのだ。
だからみんなのそばでお話を聞くだけでいい。
それだけで凄く楽しいから。
こんなんだから暗い、なんて言われちゃうのかもしれないけど。

でもこれでいいのだ。
目立つのはあんまり好きじゃない。
目立って、嫌われちゃったら元も子もないんだから。
……本当はもう少しだけ、アピールしたいなって思ったりもするんだけどね。

でも、そんなある日、突然、チャンスがやってきた。

「なあなあ、知ってるか？　学校の七不思議」
クラスの男子がいきなりそんな話を始めた。
「え？　知らない」

「この前、兄ちゃんに聞いたんだよ。なんか音楽室とか美術室の絵が動くらしいぞ」
「なにそれ？　地味」
「でもさ、心霊スポットに行って、いつも何も起こらないチャンネルよりは怖いんじゃね？」
「あー、確かにな」
そんなことを言って盛り上がる男子たち。

「え？　なになに？　何の話？」
そこにクラスの女子たちが加わる。
すると話題はもっと盛り上がっていく。

「学校の七不思議の話」
「あー、知ってる。階段の数が増えるってやつでしょ？」
「それも地味だな」
「俺が兄ちゃんに聞いたのはさ、この学校にはトイレの花子さんが出るって話なんだ」
「えーー！　うそー！」

きた！
私はみんなの話を聞きながら、小さくガッツポーズする。
だって、怪談っていえば、私の得意分野だから。

「ホントに出るらしいぞ。兄ちゃんの先輩がマジで見たって言ってたんだって」
「やだー、こわーい！」
「いやいや。さすがに嘘だろ。今の時代、幽霊なんてさ」
「そんなこと言って、お前、怖いんじゃないのか？」
「そんなことねーよ！」
「じゃあさ、見に行かね？　トイレの花子さん。三階の女子トイレにノックして話しかけたら、返事とノックが返ってくるんだってよ」

女子が聞いているから、男子は後には引けない。
売り言葉に買い言葉。
話が盛り上がって、深夜の学校に集まることになった。

面白がって、何人かの女子も参加する流れになる。
もちろん、私も参加することにした。

そして、深夜一時。
約束通り、みんな学校に集まってきた。
普段と違うことをするということで、みんなテンションが高い。
肝試しというよりは、何かのイベントみたいにはしゃいでいる。

当然、私だって浮かれている。
学校で肝試しなんて何年振りだろう。
この時間にみんなといられるだけで、本当に楽しい。

「じゃあ、さっそく行こうぜ」

男子がそう言って、みんなで三階の女子トイレへとやってきた。

「確か、こっちから四番目のドアをノックするんだよ」

あれ？
三番目じゃなかったっけ？
まあ、でもそんなことはどっちでもいい。
そんなことを言い出したらみんな白けてしまう。
だから私は黙っていることにした。

「わたし、やってみるね」
ゆっくりと歩き出して、ドアの前で立ち止まる。
ノックの後、トイレの中に声が響く。

「花子さん、いらっしゃいますか？」

トイレの中がシーンと静まり返る。

みんなが「やっぱり出るわけない」という雰囲気になったときだった。

ドアをノックする音がトイレ内に響いた。

「はい」

ドキドキしながら私はドアを開けた。

「ぎゃあああああああああ！」

みんな、大声を上げて逃げて行ってしまった。

とっても残念。

でも、ちょっとアピールできて楽しかったな。

よく読んでみると、私は一度もみんなと話していない。

つまり、私がトイレの花子さんだった。

STORY 5

お前は誰だ

やってはいけないことの中で「お前は誰だ」ってやつ、知ってる？
鏡の前で、鏡に映る自分に「お前は誰だ？」って問いかけちゃいけないっていう話なんだけど。
あれって昔、どっかの国で実際に実験して、やった人の精神が崩壊したらしいね。

でもさ、なんか嘘くさくない？
そんなんで精神が崩壊なんてするのかな？
そう思って、マシタとノリでやってみようってことになったんだよね。
で、ただやるだけじゃ面白くないってことで、どっちが長く続けられるか賭けをしたんだ。

五日くらいした頃、マシタがギブアップした。
「頭がおかしくなりそう」って言ってさ。

つまり、俺の勝ち。
けど、俺の方は特に問題ない。

マシタは俺にももうやめた方がいいって言ってきたけど、俺にしてみれば全然余裕だった。
だから、どこまで続けられるかやってみたくなった。
習慣っぽくなってきたし。

でも、マシタから何度も止められた。
だから、ウザいと思って、マシタにはやめたと言って誤魔化してた。
それでもマシタからは「ホントにやめたのか？」ってしつこく聞かれてたんだけどね。

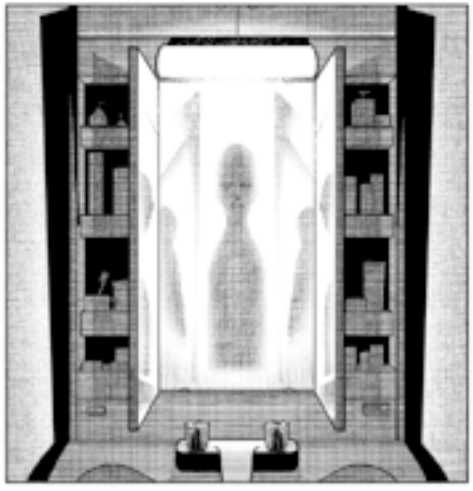
ホント、なんともない。
全然大丈夫だ。
きっと、俺の精神力はかなり強くて、こんなことぐらいで精神崩壊なんかしないんだろう。

けど一つだけ気になることがある。
それは頻繁(ひんぱん)に変な夢を見ることだ。

夢の中で目を覚ますと、俺は病室で手足が縛(しば)られた状態で寝かせられてるのだ。
で、周りの看護師とかに、「ほどいてくれ！」って言っても、冷たい目で見られるだけで、
何もしてくれない。

まあ、それだけなんだけどね。
ただ、妙にリアルなのが嫌かな。

でも、まあ、最近はその夢もあんまり見なくなってきたんだけどね。



俺は既に「お前は誰だ」で精神が崩壊している。
縛られている夢が現実の方で、精神病棟に入れられている状態になってしまった。
最近は夢を見なくなったということは、俺は段々、
現実世界に戻ってこられなくなっているということだ。

STORY 6

異世界へ行く方法

ミノルはこの世界に辟易（へきえき）していた。
代わり映えのない、繰り返しの毎日。
仕事やダルい人間関係、希望を見いだせない未来。
かといって、自ら命を絶つという決意もできない。

そこでミノルは、「異世界」に興味を持ち始めた。
こことは違う世界に行くというのは、まさにミノルが望んでいることだった。

ミノルは色々と、異世界に行く方法を調べた。
見つけた方法を片っ端から試してみるが、一向に、異世界に行ける気配がない。
そしてある日、ミノルはエレベーターを使う方法を見つけた。

一階からエレベーターに乗って、まずは三階に行く。
次に二階に行き、着いたらそのまま四階へ。
その後、もう一度二階に行って、最後は五階に向かう。
この間にエレベーターからは一度も降りず、途中で誰かが乗ってきたら失敗。

五階に行ったら、四階まで降りる。
その時に、若い女性が乗ってくる。
次に、また五階のボタンを押すと、なぜか上に行かずに下へ向かう。
そして、一階についたときに異世界に行ける。

そういう方法だった。
一般的に知られている方法とは少し違うが、実際に行って戻ってきたという書き込みがあったことで、ミノルはこの方法を信じた。

ミノルはこの方法を何度か試すが、どうしても、途中で人が乗ってきてしまう。

どうにかして、人が乗ってこなさそうなエレベーターがある建物を探すミノル。

そして、ようやく見つけることができた。
それは、廃墟(はいきょ)となっているビルだった。
今にも崩れそうなほど古くなった建物。
それなのに、なぜか、エレベーターが動くのだ。

ここなら、絶対に途中で人が乗ってくることはない。
そう確信して、ミノルはさっそく試すことにした。

エレベーターに乗り、三階、二階、四階、二階、五階に行く。
当然だが、その間、誰も乗ってこなかった。
ようやく、ここまで成功したミノルの気持ちは高揚(こうよう)する。
そして、次に四階へと降りる。
ここで、若い女性が乗ってくれば、ほぼ成功だ。

ドキドキしながら待っていると、エレベーターは四階で止まり、ドアが開く。

しかし、そこには誰もいなかった。
ミノルは失敗か、とため息をついた。
そして、思わず、五階のボタンを押してしまう。

すると、エレベーターは一度大きく揺れた後、物凄い勢いで下へと向かっていく。

成功したのか⁉

ミノルは喜んだ。
そして、エレベーターが一階に着いたとき、ミノルは異世界に行くことに成功した。

ミノルは今にも崩れそうな廃墟のエレベーターで、
この方法を試した。
１階に着いたときに異世界に行くことに成功したと
いうのは、４階でエレベーターのワイヤーが切れ、
１階に落下。そこでミノルは命を落としてしまった
ということだ。
ミノルが乗ったのは廃墟のエレベーター。
安全装置が古くて作動しなかったのかもしれない。

STORY 7

地縛霊

学生ってさ、お金がないもんでしょ？
いくら親に仕送りしてもらってるって言っても、結構、生活がカツカツなんだよね。
まあ、バイトでもすれば、いいんだろうけど、やっぱ、面倒くさいし。

となれば、やることは一つ。
無駄な出費を減らすことだ。

そこで思いついたのは、家賃が激安のところに引っ越すというもの。
で、偶然、ビックリするくらい安いところを見つけた。
前のところと比べて、二万も安いんだよ。
学生の身分からすると、月に二万円も浮くのは、かなり嬉しい。

だけどさ、そういうところって、あれなんだよね。

そう、事故物件。

俺が借りた部屋は、かなりヤバいらしくて、今まで何人も亡くなってるらしい。

でもさ、幽霊なんて結局は気持ちの持ちようでしょ？

気にしなければいいんだからさ。

それに近所の人に部屋に出るっていう幽霊のことを聞いてみたんだけど、人によって言うことが違うんだ。

ある人は髪の長い若い女って言ってて、その後は中年の男、その次は子供だってさ。

どうやら住む人が変わると、幽霊も変わるらしい。

うーん。これはもう、嘘以外ないでしょ。

そんなにコロコロ変わるわけないじゃん。

ってことで、俺は気にせずに生活してたってわけ。

まあ、そりゃ、ときどき、変な音がしたり物の場所が変わってたりしたけど、無視してたんだ。

別に害があるわけじゃないし。

でもさ、それが段々、無視できなくなってきたんだよ。

変な音も、眠れないくらいうるさくなってきたし、物がなくなったり買った覚えのない物が置いてあったりさ。

寝てるときに上から物が落ちてきたときは、正直、死ぬかと思ったね。

だから、友達のタクヤが知り合いに霊能力者がいるって言うから、あるとき格安で見てもらったんだよね。

そしたら、やっぱり、部屋に地縛霊がいるんだって。

その人が言うには、なんか特殊な地縛霊らしくて、誰かを身代わりにするまで、その場に縛られて成仏ができないらしい。

だから、この部屋に住んでる俺を、あっちに誘おうとしてるって話。

安い料金でお願いしたから、さすがに除霊(じょれい)まではしてくれなかったけど、霊から身を守る方法は教えてもらった。
それをすれば、しばらくは大丈夫だから、その間に新しい部屋を探しなさい、だってさ。
でもさ、それをやれば大丈夫なら、引っ越す必要はないんじゃね？
とにかく、俺はその夜、さっそく、その方法で除霊をやってみることにした。

まずは、体を清めるってことで、体に塩を塗り込んでからシャワーで流す。
で、次に……って、あ、バスタオルねーや。
とりあえず、ハンドタオルでささっと拭(ふ)いて、と。

次は部屋の中央に日本酒と盛り塩を置く。
最後に部屋を真っ暗にして、祈ればいい。
簡単だ。

だけど、テレビがつけっぱなしだった。

だからリモコンを探したんだけど、見当たらない。
ちょっとイラっとして、テレビのコンセントを引き抜いてやった。

そしたらさ、いきなり、バチンって音がして、部屋の中が真っ暗になったんだよね。
多分、ブレーカーが落ちたんだと思う。
まあ、真っ暗にしなきゃならないからちょうどよかった。

で、幽霊に、手出しするなって祈ったんだ。
そしたらさ、ビックリするくらい止んだわけ。
変な音もしないし、物がなくなったりもしなくなった。

いや、ホント、快適。
もっと早くやればよかった。

……って、思ってたらさ。

しばらくしたら再開したわけ。

今度はさ、ハッキリと姿も見せてくんの。

俺くらいの歳の男。

なんかでっかいスーツケースを持って入ってきやがった。

はー、面倒くせえ。

また、あの除霊をやらないとなぁ。

俺は除霊をやる際に、塩を含んでいる水で濡れた手でコンセントを触って感電死している。

部屋が真っ暗になったのは、停電ではなく意識が飛んだから。

また、一時的に幽霊が出なくなったのは、俺をあの世に引き込んだので、元々いた幽霊は成仏できたからである。

再度、出てきた幽霊の正体は、俺が住んでいた部屋を新たに契約した、新しい住人ということになる。

近所の人たちが言っていた、住む人によって幽霊の情報が違うのは、地縛霊が入れ替わっているためだった。

STORY 8

出られない教室

あ、私の番？
うーん。怖い話かぁ。
あんまり知らないんだよなぁ。
でも、怪談話の会の集まりなんだから何か話さないとね。

……あ、そうだ。
『出られない教室』って知ってる？
この学校の七不思議の一つなんだけど。

え？　そんなの七不思議の中にない？
……そうなんだ。

じゃあ、いつの間にか変わっちゃったのかな。

まあ、いいや。
みんな知らない方が、逆にいいかも。
聞いたことのある話だったら、盛り下がっちゃうもんね。

それじゃ、話すね。

その男の子は『出られない教室』の話を聞いて、興味を持ったの。
それで、放課後、一人でその教室を探し回ってたんだって。

何日も探したけど、全然見つからなくて、その男の子は「やっぱり出られない教室なんて嘘だったんだ」って諦めかけてたの。
でも、そのとき、廊下の奥に見たことないドアがあることに気付いたの。
そのドアは真っ黒で、ガラスでできてたんだって。

学校の教室のドアでそんなのないでしょ？
だからその男の子は、ここが出られない教室かもしれないと思って、さっそくドアを開けたの。
よく、そんな危険なことをするよね。
まあ、私が言うなって感じだけど。

教室の中に入ると、何もなくてガランとしてたの。
机も椅子も、教壇も、黒板もなーんにもない教室。
でもね。その教室には女の子がいたの。
たった一人で、ポツンと教室の真ん中に座ってたんだ。

男の子は言ったわ。
「こんなところで何してるの？」って。

その女の子はね、男の子と同じで、『出られない教室』に興味を持って、探してたの。

そして、男の子と同じように、『出られない教室』を見つけて、入ってしまった。
だから出られなくて、ずっと、教室の中に閉じ込められてたんだ。

びっくりした男の子は、その女の子に質問したわ。
「出る方法はないの？」ってね。

実は出る方法が一つだけあって、それには男の子の協力が必要だったの。
女の子はずっと、協力してくれる人を待ってたんだね。
女の子は協力して欲しいとお願いして、男の子は「もちろん」と答えた。

そして、女の子は男の子と協力して、やっと教室から出ることができたの。
それでね、不思議なことに、女の子は何年も閉じ込められてたと思っていたのに、教室から出たら入ったときの時間と変わらなかったんだって。
不思議だよね。
もしかしたら『出られない教室』はどこか異世界とかに繋(つな)がってたのかもしれない。

これで、『出られない教室』のお話は終わり。
どう？　怖かった？

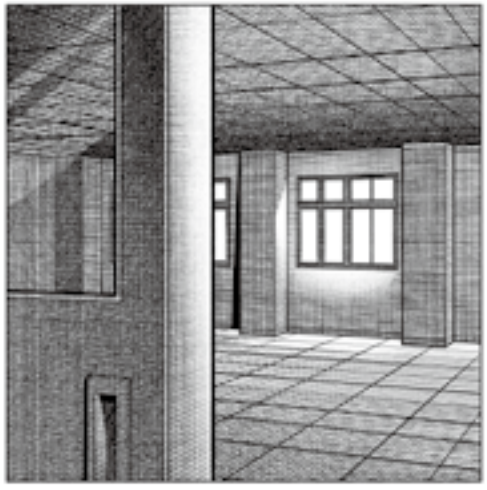
え？　あんまり怖くなかった？
そう……
じゃあ、こう言ったら、少しは怖くなるかな？

これはね、本当にあった話なんだよ。

……あれ？
それでも全然、怖くない？
そっか。ごめんね。
私はこれしか怖い話を知らないんだよね。

じゃあ、次の人、どうぞ。

立ち読みサンプルはここまで



私が話した『出られない教室』の話では、女の子は教室から出られたと言っているが、男の子がどうなったかは話されていない。
『出られない』教室から『出る』方法というのは、『男の子が代わりに教室に残る』という可能性が高い。
つまり、男の子は女の子の代わりに、教室に閉じ込められているということになる。
そして、私は「本当にあった話」だと言っている。
男の子が教室に『閉じ込められている』としたら、この話は『誰』から聞いたのか。
『出られない教室』に閉じ込められていたのは、私だったと考えられる。